

「サバ社会の発展と教育」

金子奈央

私が初めてマレーシアに行ったのは2003年の11月1日で、マハティール首相が退任した翌日でした。それからしばらくは半島で教育に関する調査をしていたのですが、縁があり、2009年から現在に至るまで、サバの教育に関する研究をしています。私がサバに関わってきたのはWawasan2020の30年のラスト10年になります。本日の発表は、Wawasan2020の30年のサバを概観（話題提供内容①）した後で、メインとしては2010年以降、断続的にサバで行ってきました教育に関するフィールドワークの話を中心にWawasan2020のラスト10年（話題提供内容②）についてお話をさせていただきたいと思っています。どうぞ宜しくお願いいたします。

一言でまとめていいのかと大変迷ったのですが、Wawasan2020、つまり1991年から2020年までのサバを考えると、やはりUMNOがサバに進出したところから始まっているのではないかと考えています。それまでのサバの州政治というのはブルジャヤやサバ団結党（以下、PBS）など、サバの地元政党が担ってきました。UMNOがサバに進出するまでも、パイリン・キティガンが率いるPBSが1985年から1994年まで政権を担っています。このPBS政権はサバ州政権を担う過程で国民戦線（BN）に入っていたわけですが、1991年の連邦議会の下院選挙の際にBNを脱退しています。それに対するペナルティーのような形で1991年に当時のマハティール首相がサバにUMNOのサバ支部を設立しました。1994年のサバの州議会選挙後に元々PBS側にいた議員が数名、BN側に移籍することで政権が交代しました。その後、2004年以降はUMNOのみ単独で過半数の議席を持つようになり、2018年の総選挙まで途切れずBNがサバ州の政権を担いました。このような経緯をふまえて「Wawasan2020の30年のサバの発展は、UMNO主導のBN政権を中心とするものだった」とまとめます。

サバ州と連邦との関係の変化について、ターニングポイントは、2008年の総選挙です。2008年の総選挙から、BN政権の維持にはサバとサラワクを取ることがより重要になり、2013年の総選挙と2018年の総選挙では、与野党ともにサバを取るということを重視した選挙活動が行われました。2018年は特にそうでしたが、サバ州もBNから希望連盟（PKRとDAP）とサバ伝統党（Warisan）へ政権交代が起きました。最後に、マレーシア全体におけるボルネオの位置づけが変わってきたということが分かる事例としてMalaysia Day（Hari Malaysia）、9月16日が2010年から祝日になったということがあります。それまでマレーシアが生まれた日としてやはり8月31日をメインにしていたと思うのですが、ここ最近、9月16日がマレーシアの誕生日であるということがボルネオだけでなく半島に

も少しずつ広く知れ渡ってきていて、この日をお祝いするようなムードがマレーシア全体でだいぶ増えています。これは、マレーシア全体においてボルネオ2州の存在感が増す事例であるとも考えられます。

ここからは(話題提供内容②として)フィールドから見るサバの教育として、Wawasan2020のラスト10年、主に2010年から行ってきたフィールド調査を元にまとめます。これからフィールドの写真をいくつかお見せしながら、3点説明します。まず1点目「国境まで行き渡る国民教育制度」についてです。パンギ島の隣にあるバランバンガン島にある公立の小学校(フィリピンとの海の国境)と、インドネシアとの陸の国境近くの村ロングパシアにある公立の小学校で、調査をしました。写真1はロングパシア調査の時に撮った写真です。

既に州首相からは交代していますが、シャフィ・アプダルがロングパシアの小学校に教育の状況を見に来た時のバナーです。ロングパシアは既に公立の小学校(Sekolah Kebangsaan: SK)が整備されていて、半島からも教員が派遣されています。一方で、この村には、まだICを取得できていない子どもが多く存在します。公立の小学校で教育を受けるためには出生証明書や、マレーシア人であるという証明(IC)が必要なので、その問題をどうにかしてほしいと州首相に訴えたということが新聞記事になっていました。写真②ははロングパシアの小学校の授業風景です。

飾られている掲示物や学校の教室のレイアウトは、都市にある公立の小学校とあまり変わらないものになっていて、国境沿いまで公教育、国民教育制度が行き渡っているということが分かる1つの事例になるかと思っています。写真③はバランバンガン島のフィリピンとの海の国境沿いの学校に行った時の写真です。

都市部で見かける小学生と同じ制服をみんな着ていて、同様に海の国境沿いにも国民教育制度はしっかり行き渡っているということを示す事例になっているのではないかと思います。そうすると、制度がかなり隅々まで行き渡っている状態で、この教育を受けられるのは誰なのかということが明確に線引きされるようになりました。「国民教育制度はあく



写真1 2018年11月にシャフィ・アプダル州首相(当時)がロングパシアを訪問した際のバナー(報告者撮影)



写真2 ロングパシアにある公立小学校の教室の風景（報告者撮影）



写真3 バランバンガン島の小学校（報告者撮影）

までもマレーシア国民を対象とした教育である」ということが、少しずつ（国民教育の機会を得られる）対象を明確化していくことになったのです。

2点目として、国民以外の社会の重要な構成員が多いサバで、「マレーシア人ではない人たちがどのような教育を受けてきたのか」について話をします。ここ10年、サバ社会で重要な構成員である国籍を持たない人、つまりマレーシア人ではない人に対する教育支援活動や教育活動というものに関する研究が多く出されています。写真④はインドネシア政府が運営している CLC（community learning center）の看板です。写真⑤は教室内を撮影したもので中は今だとかなり三密な状態なのですが、授業が行われています。写真⑥も同じようにキナバル山の近くにある、インドネシア政府が管理している CLCの様子です。

写真⑦はフィリピンの人たちの村で、教育を受けられない子供たちに対してサバ大学の学生がボランティアで基礎教育を行っているという青空学級の様子です。



写真4 インドネシア政府が管理する CLC (community learning center) の看板 (報告者撮影)



写真5 CLC の教室内風景 (報告者撮影)



写真6 CLC の教室内風景 (報告者撮影)



写真7 フィリピン人の村で開かれる青空教室（報告者撮影）



写真8 コタキナバル近郊のエデュケーション・センターの教室
（報告者撮影）

外国人に対する教育にマレーシア側の公が関わることはあまりないのですが、いくつか事例がありまして、写真⑧はコタキナバル近郊にあるエデュケーション・センターのもので、ユニセフやイケアなどの国際機関や民間企業が資援をする形で開かれているものです。このエデュケーション・センターには、教員研修などの形でマレーシアの教育省が関わっています。この他に、イスラム教育を提供する公的教育機関である Kafa が、学校に通えていない子供たちに基礎教育を提供する場としても機能している事例もあります。

最後にサバ社会で「自分たちの教育」つまり「サバの教育」を取り戻そうという動きが出ていているというを紹介して締めたいと思います。写真⑨は SK と書いてあるので公立の小学校です。ただし、（十字架やマリア像など）ミッションスクールのようにも見えるかと思います。この学校は、元々ミッションスクールだったところがそのまま SK つまりマレー語を教授用言語とする公立の小学校になっているのですが、キリスト教の要素が残った状態になっています。写真⑩もとある小学校の教室の様子なのですが、十字架が今でも教室に飾ってあります。



写真9 旧ミッションスクールの公立小学校 (報告者撮影)



写真10 公立小学校の教室の十字架 (報告者撮影)

1963年マレーシア結成時にサバが要求した20項目(自治に関するものでマレーシア協定の付属文書)の1つが教育でした。60年代はいわゆるサバ独自の教育制度というものが残った状態でしたが、それが70、80年代にかけて少しずつ連邦化していき、今では完全に中央集権的な国民教育制度の中で管理されています。元々自分たちが持っていた「独自の教育」を取り戻そうという動き、具体的にはミッションスクールの復活や、英語を使用した(教授用言語とする)学校教育を復活させようという動きが出ています。2018年の総選挙の後にシャフィ州首相(当時)が英語学校を再建、復活させることに前向きであるということをコメントしたことがニュース記事になっています。2018年の総選挙の時に、当時のナジブ首相が選挙公約でサバとサラワクに英語を使った学校を復活させるということを一部約束したことも記事になりました。サバで9月末に実施された州議会選挙で、シャフィがミッションスクールを復興させたいと発言していました。

最後にまとめます。Wawasan2020の時代のサバでは、UMNO 主導のBN 州政権によって開発が行われました。Wawasan2020の30年間でサバにおいてBNの存在感は増していったのに対し、マレーシア全体におけるサバの存在というのはしばらく小さいままでした。この間に中央集権的な国民教育制度はサバの隅々まで行き渡り、国民教育を受けられる対象の明確化、つまり国民の線引きが進みました。国民教育制度に入りにくくなった外国人に対する教育支援が特に活発化したのが（Wawasan2020の）ラスト10年でした。2008年の総選挙以降、連邦におけるサバの重要性が増す中で、サバというまとまりをもった「自分たちの教育」を取り戻す交渉が連邦政府相手に活発化しているのが現状ではないかと考えています。

〈参考資料〉

- 細田尚美（2020）「サバ在住のフィリピン人キリスト教徒」篠崎香織・山本博之編『多民族社会マレーシアにおける移民と社会統合』CIRAS Discussion Paper No.93, pp. 12-17
- 西芳美（2010）「サバ州にインドネシア人中学校 外国人労働者問題の解決に一步か」（日本マレーシア学会ウェブサイト「知識探訪」－多民族社会の横顔を読む）http://jams92.org/essay/20100830_nishi.pdf
- 山本博之（2020）「移籍の政治 - マレーシア・サバ州における政党政治の展開、1963年～2018年」日本マレーシア学会『マレーシア研究』第8・9号、pp. 67-88
- （2014）『スルー王国軍』兵士侵入事件』『地域研究』14（1）、pp. 214-237

〈新聞記事〉

- “Law doesn’t restrict the use of English in schools, says Sabah CM”, Malay Mail 10 Sep. 2018
<https://www.malaymail.com/news/malaysia/2018/09/10/law-doesnt-restrict-the-use-of-english-in-schools-says-sabah-cm/1671191>（最終閲覧日 2021年8月31日）
- “Inggeris bahasa pengantar sekolah Sabah, Sarawak” Berita Harian 7 April. 2018
<https://www.bharian.com.my/berita/nasional/2018/04/409110/inggeris-bahasa-pengantar-sekolah-sabah-sarawak>（最終閲覧日 2021年8月31日）
- “Mission school, education hub in Keningau if Warisan returns to power – Shafie” the Sun daily 10 Sep. 2020
<https://www.thesundaily.my/home/mission-school-education-hub-in-keningau-if-warisan-returns-to-power-shafie-FJ3946465>（最終閲覧日 2021年8月31日）

追記 本報告は、科学研究費補助金基盤（B）（課題番号 22H00974）の助成による研究成果の一部を含む。

（かねこ・なお 長崎外国語大学）